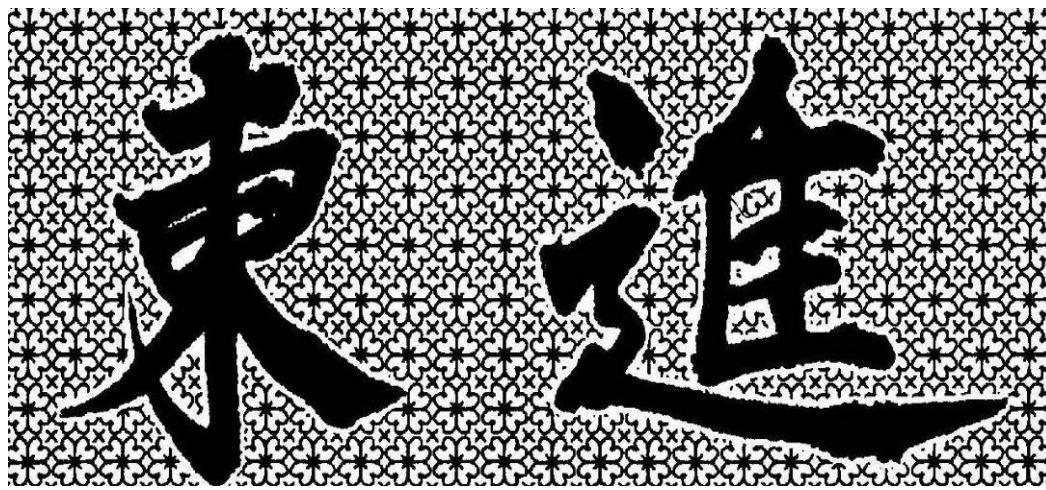


第66号

令和5年  
11月1日

題字

植木 満  
初代東進会会長


発行所

土浦一高東進会  
茨城県立土浦一高  
進修同窓会東京支部

発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階  
 宮崎法律事務所 気付 東進会事務局  
 TEL (FAX) 03-5421-5321  
 E-mail : toshinkaisecretary@gmail.com  
 ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com/>



提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

## ■ 『「荒馬」半導体産業との半世紀』

飯塚 哲哉 東進会会長 (昭和41年卒)

## ■ 『好奇心が駆動するサイエンスを未来の技術につなぐ～光格子時計の社会実装へ』

香取 秀俊 東京大学大学院教授  
(昭和58年卒)

## ■ 第26回アカンサスクラブ講演録

『日本のデジタルへの思いと CIO  
賢人倶楽部について』

木内 里美 (昭和40年卒)

## ■ リレー放談 (第16回)

『「知の経営—透き通った組織—」と  
「知のオリンピック」の取組み』  
酒井 学雄 (のりお) (昭和56年卒)

## ■ 2023年 (令和5年)

東進会通常総会のご報告

東進会・企画委員会

## 「荒馬」 半導体産業との半世紀

飯塚 哲哉  
東進会会長 (昭和41年卒)英国 Cliveden House にて  
(2023年7月)

進修同窓会東京支部(東進会)の会長を2014年6月にお引き受けして10年目となりました。東進会にとって多様性はとても大切なのですが、一時は、小さなコップの中で「切磋琢磨」に生きるような方々に接して、全く不毛な異界から身を引くべしと考えたこともありました。しかし、多くの心の広い仲間のお陰で、いま東進会は本来のぬくもりのある場になっていると感じます。世代を超えた繋がりを楽しめ、皆が支え合える暖かい場として更に発展して行けたらと願っております。

熾烈な戦いの場合はコップの中ではなく国境を越えた世界にこそあります。同窓の友を戦友としながら挑んでくる海外のコンペ達には羨望を抱くことも多くあります。しかし、思えば我が同窓にもその可能性を有する仲間が多数いらつしやる筈で、そうした機会を増やすことも大切でしょう。

ますます熾烈さを増す国際競争ですが、その代表の一つが半導体産業です。筆者は学生時代から今日まで半世紀をこえて、それに関わってきました。今回はその半導体のお話をしてみたいと思います。

かつて日本は世界制覇したにも関わらず、失われた30年と呼ばれる間にすっかり地位を落としてしまいましたが、いま国家の安全を守る重要な産業・技術として見直され、国によるテコ入れがなされようとしています。いったい復活は可能なのでしょうか。半導体史をトランジスタの発明(47年)から数えると今年76年目です。中でも直近の50年はその市場規模が増大し、国家安全保障にも強く関わり、その理解は重要です。実装密度や速度の指数関数的な革新が長期に継続する他に類を見ない特徴があり、十年単位で観ても激変を繰り返して来たことが分かります。

## \*70年代

半導体の言わば青年期、単なる可能性から実際に急成長を開始する最も魅力的な時代と言えます。非連続的な革新が多く、伝統の大企業ではなく、ベンチャー企業が産業の勃興や変化を担ってきました。第一歩は71年にベンチャー、インテルによってDRAMという記憶素子が提案され、コンピュータの主記憶素子を磁気素子から置換することから始まりました。記憶容量が最初の1キロビットから3年

毎に4倍化される驚異的な革新が開始されました。そして70年代末に世界の半導体市場規模は100億ドルという規模に成長しました。

筆者は70年に大学院に進学しました。学部卒論から学位論文まですべて半導体関係の研究でした。75年に社会人となっても、バイポーラやMOS型の集積回路という半導体の開発に没頭しました。

## \*80年代

ヴォーゲルの「ジャンパズナンバーワン」は79年発刊ですが、日本の半導体は急成長し、88年に世界シェア53%を達成、まさに世界制覇したかに見えました。

しかし日本が何故世界に勝てたのかを自ら理解する間もなく、米国との半導体摩擦にも上手く対処できずに停滞を始めます。この時代、日本の大手半導体は勝利に酔い、新たなビジネスモデルに興味がなく、また崩壊が始まったバブルの処理という重い課題もあり、半導体だけでなく、全産業が30年超の低迷の時代に突入しました。一方、韓国と台湾が急成長を始めた時代でもあります。また現在の世界の勝組達が誕生したのもこの時代です(81年メンター、82年ケーデンス、85年にTSMCとCSM)。

極めて印象的な出来事がありました。前述した世界トップの位置にいたインテル社がそのわずか13年後の84年に自ら創造したDRAMから撤

退し、CPU事業に集中する決断をしたのです。友人のイスラエル人によれば、まさに「出エジプト記」の体験者の末裔だから出来た経営判断のこのとです。日本の経営ではあり得ない判断かもしれません。

筆者は80年から米国加州パロアルトにあるHP社集積回路研究所で過ごす機会を得ました。半導体の研究も刺激的でしたが、それ以上にシリコンバレーの友人たちがベンチャーを立上げ、好きな仕事に没頭しながら、成功すれば巨万の富を手に入れ、「階級移行」をしてゆく姿にショックを受け、後の生き方を変えることになりました。

この十年間、世界の半導体は年平均成長率(CAGR)17.5%で急成長、500億ドルの規模に成長しました。

## \*90年代

この十年も世界半導体はCAGR16.0%と急成長を維持し、99年に2200億ドルに成長しました。かくも急成長する産業界の中身が穏やかなハズがありません。後半から激しい再編の時代に突入します。モトローラ(97年)、TI(98年)もDRAMから撤退、日本でも日立とNECが半導体事業を本体から合弁エルピーダに移しました(99年)。

筆者は91年(43歳)、無謀にもこの日本のバブル崩壊の時代に、東芝の部長職(部下137名)を捨てて、たった一人で半導体ベンチャーを創業し



株式上場時の仲間達 (01年8月)

ました。幸いにして、内外の友人が力を貸してくれました。国内では、川崎製鉄、新日鉄、ミネベア、ソニー、サントリー、日立、NEC等からのプロジェクトや投資に恵まれました。93年に東京大学先端研の客員教授にも招聘されました。

海外から更に大きなチャンスを得ました。創業の翌年92年、サムスン本体と合弁会社を設立したのです。そして世界の5大液晶パネルメーカーの殆どで大きなシェアを獲得しました。97年、サムスンから完全独立(MBO)し、CAGR75%という高成長を続け、創業10年で株式上場に成功しました(01年)。時価総額が創業時の2500倍となり、投資して下さいました皆さんにも多少のお礼ができました。

### \*2000年代

00年代に入ると、遅れていた日本の再編も本格化し、東芝がDRAM撤退(01年)、日立と三菱が合弁ルネサスを設立(03年)、NECエレとルネサスの統合(09年)、エルピーダに税金投入(09年)などが起こります。

一方で世界はファブレス(工場を持たない企業)急成長の時代を迎え、台湾のメディアテック、ノバテック、エムスターなどが創業、急成長を始めました。ファブレスの成長率はIDM(工場を有する企業)と比べて23%対6%と、4倍も高かったです。日本はベンチャーを重視しない国で苦戦を継続しましたが、世界の半導体はこの十年もCAGR14・6%という高成長を続けました。

筆者は日本のベンチャー文化に貢献しようと日本半導体ベンチャー協会を創立(00年)、初代会長に就任しました。経産省のご支援も頂いて32億円のベンチャーファンド設立(06年)、政府税調や産構審等の委員に就任、E&Y E O Y日本大賞(01年)、ハーバード大学ビジネススクールE O Y賞(05年)、藍綬褒章(06年)、紺綬褒章(10年)等の賞(章)も頂き、経営の孤独感を癒したものでした。

### 10年代からコロナ禍の20年代へ

11年3月、日本を悲惨な大震災が襲います。日本の第二の敗戦とも言わ

れました。半導体も例外でなく、ルネサス工場の火災、11月にはタイ洪水、エルピーダ破綻、シャープが液晶工場を外部へ、パナ、ソニー、シャープ、ルネサス、ロームなどの巨額の赤字など苦戦しました。この時代、時の政権は1ドル70円という円高を放置したのです。

流石に世界の半導体も10年代前半はCAGR2・3%という低成長に初めて陥り、後半の5年間は世界の半導体大再編が更に進展しました。

弊社も事業拡大の為に、台湾企業から画像処理事業を買収(09年)、メガワット規模の太陽光発電事業も開始(14年)、また通信やIoT分野の事業を行うCathy社をM&A(18年)、成長の道を探ってきました。

19年12月から世界はコロナ禍に襲われ、多くの産業が苦戦を強いられました。人が移動できないことで新たな半導体需要が生まれ、更に米中摩擦も加わり、深刻な半導体不足がクルマや家電などあらゆる製品の製造を止めることになりました。

半導体不足と言われる中、世界の半導体は高成長を遂げ、20年は対前年比6・8%増の4404億ドル、21年はなんと26・2%増の5558億ドル、22年は16・3%増の6465億

ドルでした。23年も5%強の成長が見込まれています。

22年2月にウクライナへの侵略戦争が勃発し、世界中で半導体は国家安全保障の要と認識され、各国が国家予算を投入して自国内での半導体製造にテコ入れを始めました。日本も補助金投入を決めました。その金額は相対的に小さく、ビジネスモデルも良く見えず、成果を得るのはかなりの挑戦でしょう。

駆け足で半導体と我が半生を振り返ってきました。半導体は正に「荒馬」そのものですが、この半世紀に渡り急成長を継続し、いま市場規模1兆ドルを目前にしています。経済的にも国家安保としても軽視できない産業です。巨大資本とベンチャーが重要な役目を果たしてきていますが、日本は、文化的にも構造的にも脆弱で、非連続的な変化や巨大投資を伴う競争が苦手です。加えて日本には敗戦後に仕組まれた自縛自縛の構造が強く存在します。その基盤である憲法も議論しませんが、世界は多極化し、西側の論理だけでは通用しない、きな臭い時代に入っています。少子高齢化だけでなく横溢する「課題先進国」日本は強い依存心を脱し、自律の心を取り戻し、跋扈する「荒馬」達と伍して行く覚悟をして、また再び焼け野原となる前に底を打ちたいものです。

### 令和5年東進会総会講演

#### 「好奇心が駆動するサイエンスを

#### 未来の技術につなぐ

#### 「光格子時計の社会実装」

香取 秀俊(昭和58年卒)

東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻

理化学研究所 香取量子計測研究室

katori@amo.t.u-tokyo.ac.jp

アインシュタインの相対性理論によれば

「重力が強いところでは時間はゆっくり進む」という。これまでロケットや人工衛星を使った実験で検証されてきたわずかな効果だが、極めて高精度な原子時計によって、普段の生活のスケールでも観測できるようになった。こうした時間計測の進展は、未来の物理学や社会をどう変えるだろう。

#### 【原子が刻む普遍的な時間】

時計は、普遍的な周期現象を使って万人で時間を共有するための仕掛けだ。かつては地球の自転や公転などの天文観測で1秒を決めたが、1967年からはセシウム原子の振動を使って国際単位系(SI)の1秒を決めるようになった。このセシウム原子時計は、天体の運行より遥かに規則的なマイクロ波の振動を刻み、6000万年で1秒もずれない精度をもつ。

マイクロ波に比べ約10万倍も高速に振動する光の波を使えば、振動の刻みが細かくなった分、時計の精度が向上する。光の発振器であるレーザー技術が成熟し、レ

ーザーを使った原子の運動制御技術が進展した結果、光の振動を読み出す新しい原子時計の研究がこの20年あまりで飛躍的に加速した。

炎色反応で観測されるように、原子は2つの電子軌道のエネルギー差で決まる固有の色の光を吸収、放出する。この光の波長は、物理定数で決まる原子に固有の振動数をもっている。このため、物理定数が普遍で不変と思う限りは、固有振動数を時計の振り子として使う原子時計は理想的な時計だ。

#### 【光格子時計】

2001年に光格子時計と名付けた新しい時計手法を考案した。頭の中で思い巡らす限りは、従来手法を圧倒的に上回る性能が出そう。世の中が変わるような面白い時間計測ができるかもしれないと curiosity driven に始めた研究だった。

魔法波長と名付けた特定の波長のレーザーを使って卵パック状の原子の容器(これは光格子と呼ばれる)を作って原子を捕まえると、この容器の中では原子の固有振動数が変化しないことが計算から予想された。この光格子にレーザー冷却によって絶対零度近くまで冷やしたストロンチウム原子を捕獲する(図1)。光格子時計では、多数の原子の固有振動を一度に測定して強い信号を得ることで、短時間の測定で高度な原子時計を実現する。

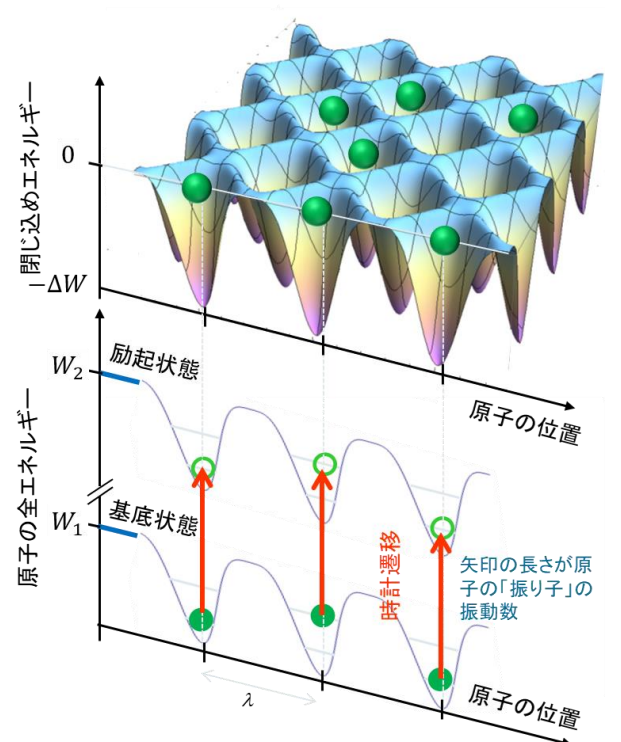


図1: 光格子時計の概念図。(上)3次元的な光の干渉縞を作り、光電場の腹の位置に原子(緑球)を捕まえる。これは光格子と呼ばれる。(下)魔法波長のレーザーで光格子を作ると、原子の捕獲に必要なエネルギー変化が原子の上下準位で相殺し、遷移周波数が変化しない。

#### 【世界で始まった光格子時計の研究、秒の再定義】

我々が最初の実証実験に成功した2005年頃から、世界中の研究機関で光格子時計の研究が始まった。国際単位系(SI)の定義にもとづいて測定を数値化して研究者間で比較、検証するのが科学研究の第一歩だ。

現在、ストロンチウム原子を使った光格子時計の振り子の振動数は、世界中の測定値の平均値から 429,228,004,229,873.0 Hz と求められている。この16桁の有効数字はセシウム原子時計によるSI秒の定義の不確かさに制限され、本来、光格子時計が実現できるはずの18桁の精度を記述す

ることができない。研究を始めた頃、盤石に見えた秒の定義だったが、ついに定義の限界に迫る測定ができた。

科学の知見を数値化して共有できないのは不便だ。これを解消するのが、2030年の国際度量衡総会(CGPM)で行われる予定の「秒の再定義」だ。2026年のCGPMまでに候補原子を決定し、2031年に「新たな秒の定義」を実施するロードマップが作られている。現在、秒の再定義の議論の焦点は

- ① (セシウム原子時計のときのように)特定の原子の遷移周波数で定義するか?
- ② 複数種類の原子の遷移周波数の加重平均で定義するか?

だ。多彩な研究の余地を残したい研究者・アカデミアと、1種類に決めて欲しい産業界、社会のニーズのせめぎあいだ。セシウム原子時計の定義を採択した頃は、他に原子時計候補の選択肢がなかったが、今やストロンチウム原子による光格子時計をはじめ、世界中で多種多様な原子時計の研究が進むことが、半世紀前との大きな違いだ。

#### 【相対論的な時間が見える】

2台の光格子時計の「振り子」のわずかな振動数差が引き起こすうなりを測定しよう(図2)。2台の時計の高さが同じとき、うなりはゼロ(グラフの赤線)だが、片方の時計を1m持ち上げると、約0.05 Hzのうなりが観測される(グラフの青線)。これは、上方の時計が早く進む相対論的效果で、重力赤方偏移と呼ばれる。

こうして、高精度な原子時計は、重力でゆがむ時空間(時間と空間を合わせてこ

う呼ぶ)を読み出すセンサーになった。2019年に、これら2台の時計を東京スカイツリーに設置して450 mの高低差を与え、時計間のジオポテンシャル差が重力赤方偏移到一致することを検証する実験を行った。この検証精度は、従来の1万kmもの高低差をつけた宇宙実験に比肩した。この結果、相対論はロケットを使って検証する対象から、地上で利用する新たなセンシング手法に変貌した。

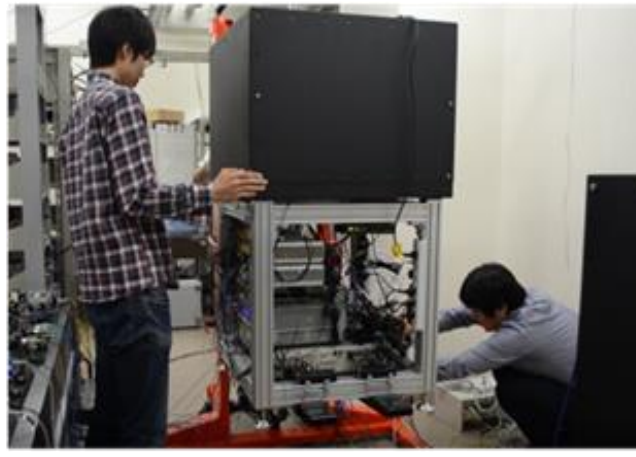
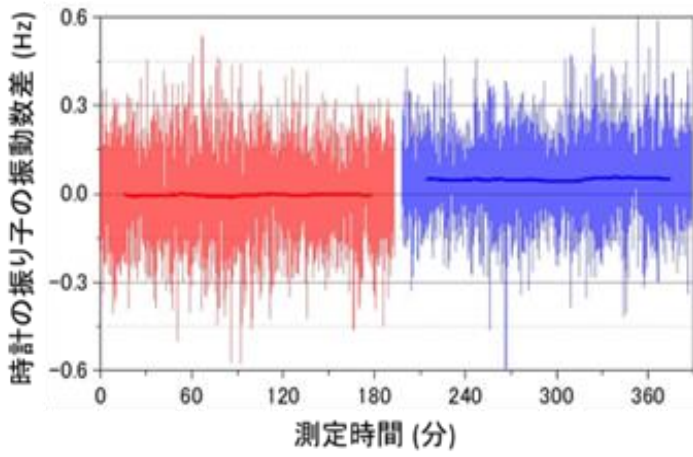


図2:(左)2台の光格子時計の振り子の振動数差。赤色は同じ高さに置いたとき、青色は1 mの高低差を付けたとき。グラフの実線は30分平均後のデータを示す。(右)1 mの高低差を付けた光格子時計(黒い箱)の本体の写真。

### 【光格子時計のネットワークを作る】

この20年で長足の進化を遂げた光格子時計の応用を考えたい。その一つが、相対論効果を使った新しい測地技術「相対論的測地」である。多数の光格子時計を繋げるネットワークを作ると、時計間の周波数差から標高差を実時間で読み出す「量子水準点」ネットワークができるだろう(図3)。相対論的測地では従来の水準測量と違って、測量距離の平方根に比例する累積誤差を生じないこと、短時間で測定結果を得られることが大きな利点だ。たとえ100 km離れても、数時間の測定で、2地点間の高低差を時計精度で決まるcmの不確かさで読み出せる。このような長距離では(月や太陽による)地球潮汐の効果が10 cm程度にもなり、半日周期で変化する「地球の柔らかさ」が見えるだろう。理研(埼玉県和光市)から約500 km離れた水沢天文台(岩手県奥州市)に光格子時計を設置し、時計の遠隔比較実験が進行中だ。

遠隔地の標高差を実時間でマッピングする時計ネットワークは、スロー・スリッピングなどの地殻変動、マグマの移動など、実時間で地下の構造を観測するセンサー・ネットワークとして役立つだろう。プレート境界

に立地する日本ならではの展開、例えば、地震学、火山学への貢献を考えたい。



図3:光格子時計のネットワーク。超高精度な原子時計のネットワークによる相対論的なセンシングで地殻変動を捉えるなどの応用が期待される。20年後の社会で相対論効果がどう使われるか、我々の想像力が試される。

### 【シーズドリブンの未来を考える】

原子時計を搭載した測位衛星による全地球測位衛星システム(GNSS)が、スマホのナビゲーションで重宝され、自動運転技術の推進力になろうとは、70年前の原子時計の発明者たちの想像を絶するはずだ。今後もうこうした時を刻む技術の高精度化を契機とする社会変革が継続することに疑問の余地はない。光格子時計は、未だにニュートンの絶対時間で凝り固まった時計の使い方に、相対論的時間を導入する。アインシュタインの相対論にインスパイアされたサルバドールダリが90年も前に描いた「記憶の固執」の時計を彷彿とする、重力で曲がった時空間の可視化技術の誕生だ。

想像をはるかに超えた時計技術の展開を、あるべき未来のバックキャストで考えるのは不可能だ。今の技術の延長線上に「ありうる未来」を想像し、構想することが大切だ。新しい時計は、時間を共有・確認し合う仕掛けから、時空の歪みを利用し、新たな物理を探るセンサーへと時計のパラダイムシフトを加速する。想像を超える未来の時計の展開が楽しみだ。

## 第26回アカンサスクラブ講演録

「日本のデジタルへの思いと

CIO 賢人倶楽部について」

木内 里美 (昭和40年卒)

1965年卒の木内里美です。この度

アカンサスクラブでの講演を依頼され、リモートで1時間ほどのお話をさせていただきました。そのきっかけとなったのは、私が主催しているCIO 賢人倶楽部というコミュニティが開催したセミナーの取材記事が「経済産業新報」という新聞に掲載され、その記事をご覧になったご担当の方から連絡をいただきました。ご縁とは面白いものですね。その経緯から講演のテーマは「日本のデジタルへの思いとCIO 賢人倶楽部について」としました。

### 自己紹介

社会人になったのは1969年、大成建設株式会社に土木のエンジニアとして入社しました。長く土木設計部門で主に港湾施設の設計に従事していましたが、1991年にシステム技術室長を兼務する形で部門の情報責任者になりました。

この当時としては珍しい一人一台のMacintosh (Apple 社) を導入し、ネットワーク時代のワークスタイルを構築しました。1996年にはApple社の社長の訪問を受けて、デイスカッションするという機会にも恵まれました。

そのような経緯から、2001年に土木部門を離れて情報企画部長として全社の情報統括を命じられ、7年間に亘りシステムの再構築や情報子会社の改革や様々な仕組みの改革に取り組んだところ、2003年に日経情報ストラテジーから初代の「CIO オブザイヤー」のアワードを受けるとなりました。

その後、大成ロテックという道路会社の常勤監査役を4年間勤め、それらの経験を生かして、65歳で株式会社オランという経営コンサルタンの会社を起業し、現在に至っています。

### DXで大騒ぎをしている日本

皆さんも最近DXという言葉をよく耳にするようになったと思います。これはデジタル・トランスフォーメーションのことで、デジタル技術を活用してビジネスの変革を求めています。その発端は2018年9月に経済産業省が公表した「DXレポート」にあります。そのレポートの中で、古いコンピュータシステムを改修してデータ活用ができるようにしないと、2025年には大きな損失をもたらすという、いわゆる「2025年の崖」というキーワードがあり、蜂の巣を突いたような騒ぎになりました。

もう5年が経過し崖まで2年しか残されていませんが、目覚ましいDX事例は限られています。社長を中心とする経営陣が取り組むべき課題なのですが、現場に投じてしまうためにうまくいっていないのが日本のDXなのです。

### デジタル敗戦国を露呈した日本

スイスにある国際経営開発研究所(INEC)は毎年各国のデジタルランキングを発表しています。デンマーク、米国、スウェーデン、シンガポール、スイスと続きますが、日本はなんと29位で韓国、台湾、中国にも後塵を拝しているのです。

皆さんの記憶にも新しいコロナパンデミックが始まった時、給付金の配布がなかなか出来ないとか、収入に応じた給付が出来ないとか、ワクチン接種でも大混乱でした。更にデジタル庁管轄のマイナンバーの発行と管理でデータの不整合を起こしています。日本はデジタル敗戦国と呼ばれているのです。

日本で電子国家を標榜して「電子国家法」を制定したのは2001年です。同じ年に始まった韓国は10年で完成させました。地方自治体のシステムは統一され、一つのシステムで動いています。日本は23年目になっても各市区町村のシステムはバラバラです。

どうして日本はすっきりとした仕組みが出来ないのか？理由はいろいろ考えられますが、憲法92条が弊害になっていることをメディアも報じません。92条では強力な地方自治の権利を認めているので、公共的業務について処理する固有の機能を認めているのです。それが住基ネットでも導入を拒否する自治体が現れて頓挫した根源です。憲法9条の改正論議より、壮大な無駄を作っている憲法92条の改正を行うべきだと思います。

### 日本社会の弱点と教育問題

原稿は2000文字と限られているために、残りが少なくなり多くのことを書けません。私が特に大切だと思うことを書きます。それは同調圧力とか、つまらない付度とか、出る杭を打つとか、高校までの教育でまともに英語も話せない日本の社会を作っている日本の教育問題です。

日本の教育は大学に行くまで、知識偏重の均等教育が基本になっています。アートやデザインやエモーショナルな教育には力を入れていません。自発性、自立性を促すデンマークの教育とは対極にあります。この人材育成が電子国家世界1位、幸福度世界2位、子供の貧困度最下位(OECD)、国民学校10年間で全員が英語を話せる社会を創り出しているのではないかと思っています。

### CIO 賢人倶楽部について

CIO 賢人倶楽部は私が勝手に運営しているCIO (情報統括責任者) や CDO (デジタル統括責任者) のためのコミュニティで2009年から始めました。私自身が体験し、社内に相談相手がいないことや、大きな投資決断を孤独にする重いミッションを持つ仲間の交流の場を作りたいかっただけです。会員の情報交換や現場見学会や年に1〜2回の公開セミナーなどを、協賛いただいている複数の会社の支援で活動しています。また、15年間毎月書いているコラムがあります。ぜひ「木内里美」と検索して是正勧告コラムもお読みください。

## リレー放談(第16回)

「知の経営―透き通った組織―」と  
「知のオリンピック」の取組み  
酒井 学雄(のりお) (昭和56年卒)

「知」について、学生時代から考えてきた。「知」とは何か？

人間は、学習することで「知識」を持つことが出来る。動物には無い「知恵」を持ち、新しい価値・VALUEを生み出すことが出来る。知識、知恵を集合し、



融合させると「知」になる。知は、無限の広がりを持つ宇宙のようなものである。そして人間には「心」がある、それらが発信するもの、それが「知心」である。そして「愛」が包み込む。

21世紀の社会、経営の求める方向性が、経済至上主義的な考え方からウェルビーイング、エンゲージメント、健康経営等が重視されるようになってきた。来春に武蔵野大学に日本初の「ウェルビーイング学部」が開校する。慶応大学の前野教授が学部長に就任する。テーマは「世界の幸せをカタチにする。」とある。

大学の頃、「ナレッジマネジメント」という単語に触れた。社会人になって、ビジネススクールで「知の経営」を学んだ。ナレッジマネジメントは、師である高梨智弘先生により、日本人の「知心」を入れた「知の経営」へと昇華した。そこに提唱されているのは、「愛に満ちた透き通った組織」である。日本の政治家に、まず学んで欲しいものである。

高梨智弘先生は、知の経営の実践の場として設立したのが、(一社)日本イノベーション融合学会である。そして、知心を競い、融合し、新しい価値の創造を目指す「知のオリンピック」の本格開催へとつながった。

私、酒井学雄も主催する(一社)日本イノベーション融合学会の理事として、知のオリンピック実行委員会副委員長として、司会をしながら、透き通った知心の価値の共創に触れた。今回2023年は、インド大使館と連携して、インドと融合したイノベーションをテーマとした。土浦一高のよぎ校長に副審査委員長として、協力をして頂いた。卒業生である青山大入衆議院議員も会場の衆議院議員第1議員会館国際会議場に駆けつけてくれた。以下、学会に投稿した論文の一部を参考に転載する。

「知のオリンピック」は、石川昭・知のオリンピック初代実行委員長が60年前に提唱し、元IOCのサマランチ会長の承諾を受け開こうとしていた、人類史上最大のイノベーションを目指した「第3世代のオリンピック」である。当初は石原慎太郎氏や竹村健一氏が協力・支援していたが、故・高梨智弘・前日本イノベーション融合学会理事長が牽引するようになり、第2代・相磯秀夫氏(慶應義塾大学名誉教授)、第3代(共同委員長)・郷農彬子氏(株式会社バイリンガル社長)・秋葉武志氏(公認会計士・税理士)と引き継がれ、2019年7月21日から現在まで第4代・藤掛正史氏(中央区ユ

ネスコ協会会長)が重責を担っている。

「第1世代のオリンピック」は人類の祭典として3000年に及び体力を競う体力オリンピックが行われ、「第2世代のオリンピック」においては、1954年、スペインで技能オリンピックが行われた。人類が体力や技能だけでなく、創造力、開発力、構想力、コミュニケーション力などの知力を競うことで、全人格的完成国家間の戦争・紛争のエネルギーを平和や協調のエネルギーに



転換していくという理想を説いたのが「第3世代のオリンピック」である。知のオリンピック」である。今回に先立ち、2019年8月7日には衆議院第一議員会館大会議室において「知のオリンピック」プレビュー大会を開催した。2020年には神奈川県大和市の文化創造拠点シリウスにおいて「知のオリンピック」大会を企画したが、コロナ禍のため開催に至ることができなかった。また2022年には文京シビックにおいて開催してきた経緯がある。今回もコロナ禍第9波の中にあつたが、議員会館事務所の理解を得ることに成功し、2023年度「知のオリンピック」大会を無事に開催することが出来た。

2023年度「知のオリンピック」大会が、2023年8月31日、東京・千代田区永田町の衆議院第1議員会館国際会

議場で開催された。これは、防衛大第1期生、青山学院大学名誉教授(元危機管理学会会長)であつた、故・石川昭氏の遺志を継いで開かれたものだ。

開催挨拶に立った西山敏樹・審査委員長は主催者を代表し、「世界、若者、多様性をテーマに、幅広く老若男女の知の結集の場が持てた。このような場は大変に意義があり、新しい知見、イノベーションの種を共有していきたい」と挨拶を述べた。

来賓として青木愛参議院議員と尾崎正直衆議院議員が会場に駆けつけてくれた。青山大人衆議院議員の青山祐三子秘書と白坂亜紀参議院議員の神田信浩秘書が祝辞を代読し、長坂康正衆議院議員の佐々木昭雄秘書と青木愛参議院議員の葛西宏悦秘書が参加下さった。また公益財団法人日印協会からは祝辞のメッセージが届いた。

今回の開催テーマは、「インド・学生・女性」であり、インドに関係する会社経営者や、若い高校生(学生)や、子育てをしながら働く女性たち12名が集った。世界の人々のクオリティ・オブ・ライフ(QOL)向上と地球のSDGsに貢献するモノ・コト・イシのイノベーションに向けた、これら12名の提案・実践を、人財と文化、健康と食、環境と産業、経営と金融、ICTとコミュニケーション、グローバルとローカルの6つの競技分野で発表して競い合うものだ。新規(奇)性、論理性、有効性、持続可能性、社会貢献性の5つ評価基準に照らして、審査が行われた。

審査委員長は西山敏樹・一般社団法人日本イノベーション融合学会理事長、副審査委員長はプラニク・ヨゲンドラ茨城県立土浦第一高校校長、審査委員として大場多美子・一般社団法人日印女子フオラム代表、小野瀬由一・一般社団法人日本イノベーション融合学会副理事長、藤掛正史・一般社団法人日本イノベーション融合学会会長の計5名が務めた。また司会は酒井学雄・「知のオリンピック」



実行副委員長が務めた。

今回の競技は団体(組織力・資金力)と個人を分けて、全個人のみを審査対象とした。評価はプレゼ

ンテーションと提出書類(発表用のPPT)による審査とし、厳正な審査の結果、金賞は安岡千春氏(200法人日高わのわ会)の「できる人が、できる時間に、できることを」が選ばれた。

今回は昭和52年卒の野口稔さんにバトンタッチします。どんなお話が聞けるのか、今から楽しみにしています。

**2023年(令和5年)  
東進会・通常総会のご報告**

2020年から新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、オンライン形式での総会開催が続いておりましたが、今年は4年ぶりの学士会館での総会・懇親会となりました。感染症法上の分類が、季節性インフルエンザと同じ5類に移行されたとは言え、高齢者の参加も多く見込まれる同窓会ですので、会場となる学士会館とも慎重に打合せをして準備をし、無事開催の運びとなりました。

令和5年6月11日(日)午後1時30分から「通常総会」、引き続き第2部の「講演会」・「懇親会」と待ちに待った本当に久しぶりのリアル同窓会となり、参加者は例年より少な目でしたが、大変盛り上がりしました。当日の参加者総数は70名、オンラインでの参加が4名でした。

通常総会の議事次第と審議結果は以下の通りです。

**【総会】**

- 来賓ご挨拶  
土浦一高・附属中学校校長  
プラニク・ヨゲンドラ様
- 会長挨拶  
東進会会長 飯塚 哲哉
- 2022年度活動報告  
事務局より
- 会計報告・監査報告  
会計担当、会計監事より
- 審議事項

- 議案1 2022年度決算報告
- 議案2 2023年度予算案

いずれも全会一致で原案通り承認されました。書面による議決権行使・委任状提出78名を含みます。

**【演奏・演舞】**

今年も吹奏楽部の演奏・応援指導部による演舞を事前収録していただき、会場で動画により紹介しました。

**【講演】**

○「好奇心が駆動するサイエンスを  
未来の技術につなぐ」  
光格子時計の社会実装へ」  
東京大学大学院教授 香取 秀俊様

※講演内容の要旨は4〜5ページに掲載しております。



学士会館会場にて香取教授の講演を聞く参加者

事前の動画収録にご協力いただいた一高生徒の皆様や先生方、大変お忙しい中、

講演を引き受けていただいた香取先生、そして関係者の皆様には紙面をお借りして改めて感謝申し上げます。

**【今後の予定】**  
・アカンサスクラブ  
令和5年12月7日(木)オンラインにて午後6時半より  
・来年度の東進会総会  
令和6年6月9日(日) 対面にて開始時間未定  
皆様のご参加をお待ちしております。

**【編集後記】**

新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類に移行したため、日常生活が戻ってきました。東進会総会も対面で開催することができ、本当に良かったです。久しぶりにお会いしたご参加の皆様はお元気そうでした。来年度以降も、ぜひ対面で総会を開催したいものです。

8月23日に慶応高校と仙台育英高校の決勝戦を甲子園球場で初めて観戦しました。球児たちの活躍ぶりを目の当たりにして、本当に感動しました。迫力のある応援は印象に残り、土浦一高の応援を思い出しました。映像を通してではなく、生で見る試合は臨場感あふれ、とても素晴らしいものです。これからもずっと対面で人と人がつながれるような世界が続くことを願っております。  
(星川)